

ラジオドラマ『クラッシン号、イタリア号を救う』（1930年放送）に ドキュメンタリードラマ概念の萌芽を探る

杉田 このみ

はじめに

ドキュメンタリードラマとは、ラジオやテレビの番組名や番組説明に見られる用語で、放送時に明記されている番組もあれば、のちの批評家や制作者などからそのように位置付けられる番組もある。その起源や定義についてはあいまいである。本稿では、主に実際の出来事に基づいて、あるいは取り入れてドラマ化する表現手法の一つと捉え、NHKのラジオ・テレビ草創期におけるドキュメンタリードラマの表現手法の変遷について検討する。もちろん民放でもドキュメンタリードラマを制作しているが、NHKに限定する理由としては下記の通りである。

- (1) web上に公開された番組データベース（NHKクロニクル¹）がある。
- (2) ラジオ放送開始から番組記録（放送番組表）があり、台本もいくつか残存し、それを（学術目的限定）NHK放送博物館にて閲覧することができる。
- (3) NHKアーカイブス、公開ライブラリー、トライアル研究などを利用して、番組を視聴することができる。
- (4) 先行研究があること。

NHKでは、現在でもドキュメンタリードラマの手法を取り入れた番組が多く放送されている。例えば、2022年5月2日NHK BSPで放送された『沖縄本土復帰50年 ドキュメンタリードラマ ふたりのウルトラマン』（脚本・演出：中江裕司）がある。ドラマと当時を知る証言者たちを交えながらウルトラマン誕生の秘話を描いている。

また、Eテレでは『ふるカフェ系 ハルさんの休日』²という連続番組があり、俳優の渡部豪太が「人気カフェブロガー、真田ハル」として登場し、実際のカフェを巡り、そのオーナーやスタッフ、常連客が本人として登場する。この番組では冒頭にテキストで「この番組は 全国のカフェを舞台に渡部豪太さんと地元のみなさんが出演してつくるドラマなのです」と表示され、エンドクレジットでは「このドラマは事実をもとにしていますが ほんの少しだけフィクション

¹ NHKクロニクル <https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/>

² 2015年にパイロット版が放送、2016年よりシリーズ放送。2022年4月7日～毎週木曜22:30～22:54に新シリーズスタート（2022年9月現在）<https://www.nhk.jp/p/furucafe/ts/W6Z2W3826N/>（2022年9月11日参照）

です」と表示される。

このドキュメンタリードラマの手法が視聴者に広く知られるようになったのは、1975年に今野勉³（1936-）が演出した番組『欧州から愛をこめて』（日本テレビ）と、今野によるほか演出番組と位置付けられている。2017年早稲田大学演劇博物館で開催された『大テレビドラマ博覧会』⁴ 図録に、次のように記述されている。

物語の中でリポーター役として伊丹十三が登場し、さらに実在の関係者が本人役で出演するなど、ドキュメンタリーとフィクションが融合し、後に「ドキュメンタリードラマ」と呼ばれる新しいテレビドラマ表現方法を開拓した記念碑的作品である。

また、1990年8月13日NHK衛星第二で放送された『今野勉ドキュメンタリー・ドラマスペシャル』⁵では、今野が演出したドキュメンタリードラマ6本を五夜連続放送された。その際、今野は「ドキュメンタリー・ドラマ生みの親」と紹介されている。

しかし、1950年代から番組名にドキュメンタリードラマと明記された番組⁶があり、さらに遡ると、後年にテレビ制作者や批評家たちから、今日的なドキュメンタリードラマの先駆的な番組と言及されている番組もある。その一つが、1930年（昭和5年）にNHK⁷で放送されたラジオドラマ⁸『クラッシン号、イタリア号を救う』⁹（以下、『ク号』）は「ドキュメンタリードラマのはじまり」と言及されている¹⁰。『ク号』は1928年（昭和3年）に実際に起きた遭難事故をもとにしたラジオドラマである。

³ 1936年生まれ。演出家・脚本家。秋田県生まれ、北海道夕張市育ち。1959年、ラジオ東京（現TBS）に入社。1970年に仲間とともに、制作プロダクション「テレビマンユニオン」を創設。ドラマとドキュメンタリーの垣根を越えた数多くの番組を演出。著書多数。『宮沢賢治の真実修羅を生きた詩人』（2017、新潮社）蓮如賞受賞。2019年『映像詩 宮沢賢治 銀河への旅～慟哭の愛と祈り～』（NHK放送）の演出や、長年にわたるテレビへの貢献が称えられ、2020年、第61回毎日芸術賞特別賞。令和2年度文化功労者顕彰。元・武蔵野美術大学映像学科主任教授。テレビマンユニオン取締役最高顧問。一般社団法人「放送人の会」会長。

⁴ 岡室美奈子監修・木原圭翔編著『大テレビドラマ博覧会—テレビの見る夢』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2017年、p.97

⁵ 放送された番組は『欧州から愛をこめて』（初回放送 1975年日本テレビ）、『燃えよ！ダルマ大臣 高橋是清伝』（初回放送 1976年フジテレビ）『B円ヲ阻止セヨ！ ～もう一つの占領秘話』（初回放送 1977年フジテレビ）、『望郷・日本初の第九交響曲板東俘虜収容所物語』（初回放送 1977年フジテレビ）、『靈感少女』（初回放送 1980年読売テレビ）、『あめゆきさん』（初回放送 1979年TBS）。

⁶ 1952年『セミドキュメンタリードラマ 水郷柳河こそは我が生まれの里』（ラジオ九州放送）は、第7回芸術祭奨励賞。1957年『放送記念日特集 ドキュメンタリードラマ「へき地に生きる」』（R1、製作：NHK社会部、山形放送局放送部）などがある。

⁷ 正確には東京放送局（JOAK）だが、本稿ではNHKと統一する。

⁸ ラジオ放送草創期は「ラヂオ」と表記されていた。本稿では、一般的な意味では「ラジオ」、当時に合わせるときは「ラヂオ」と表記する。

⁹ 台本に書かれている題名は『クラツシン號イタリア號を救ふ（ノビレ少將遭難記）』。1930年11月10日放送。午後8時45分～午後9時40分の放送時間なので、55分間のドラマだったと考えられる。

¹⁰ 日本放送協会編『放送夜話—座談会による放送史』1968年、日本放送出版協会

本稿では、現存する台本（のちに書籍化されたものも含む）や放映当時の新聞雑誌記事、後年の制作者による言説などをもとに、1925年（大正14年）ラジオ放送の開始からあったラヂオドラマ（ラヂオ劇）の歴史の変遷を踏まえ、『ク号』のドキュメンタリードラマ概念の萌芽について探る。

北極探検イタリア号 遭難事故の経緯と日本での認識

『ク号』は1928年に実際に起きた遭難事故をもとにしている。北極探検に出た飛行船イタリア号（隊長：ノビレ少将）が遭難し、信号も途絶え、救助は絶望視されていたが、救助を求める無線信号をキャッチできたことで、ロシアの砕氷船クラッシン号が救出する。その遭難と救出について、当時日本でも連日報道された。『ク号』とどのような箇所事実の一致があるか検討するため、ここで実際の遭難事故と救出の経緯を、当時の新聞記事や『ノビレ少将北極探検記』¹¹などを参考に概説する。



図1 ノビレ少将とアムンゼン（『ノビレ少将北極探検記』より）

¹¹ 大阪毎日新聞社外国通信部 編『ノビレ少将北極探検記』大阪毎日新聞社、1928年、全129頁、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1180300>（参照2022-09-09）



図2 北極に向かうイタリア号（同）

1926年にイタリアのウンベルト・ノビレ（*Umberto Nobile*, 1885-1978）は、自ら設計した飛行船ノルゲ号で、ノルウェーの探検家ロアルド・アムンゼン（*Roald Engelbregt Gravning Amundsen*, 1872-1928）とともに北極点の上空飛行を成功した。これが初めての北極点上空飛行であったと考えられている。それ以前にアムンゼンは、1911年に人類史上初の南極点到達に成功しており、世界的英雄だった。その後、ノビレとアムンゼンは、さまざまな行き違いなどから良好な関係ではなくなってしまった。

1927年、ノビレは新たに設計した飛行船イタリア号の隊長として、再び北極点を目指すことを発表する。乗組員16名と愛犬ティティーナと1928年5月24日に北極点に到達した。翌日25日朝日新聞朝刊に「イタリア号2時間に渡り上空を飛行」¹²とあり、同日夕刊には「イタリア号北極へ達す ノビレ少将 再挙成功」¹³と即時に報道した。しかし、新聞で報道されたころ、イタリア号はすでに墜落し、何人かの乗組員は死亡、あるいは行方不明、遭難者となっていた。「赤い天幕」を設営して救助を待っていた。5月27日夜にシベリアなど北端にある無電局が、

¹² 国旗を落下し、北極を引上ぐ イタリア号2時間にわたり、北極の上空を飛行。朝日新聞。1928-05-25、朝刊 p.11、朝日新聞クロスサーチ、<https://xsearch.asahi.com/shimen/pdf/?1662352287978>（参照 2022-09-09）

¹³ イタリア号北極へ達す ノビレ少将 再挙成功。朝日新聞 .1928-0525、夕刊、p.2、朝日新聞クロスサーチ、<https://xsearch.asahi.com/shimen/pdf/?1662352233203>（参照 2022-09-09）

イタリア号から途切れ途切れの信号「イタリア号遭難航行不可能、救助頼む……」(11, p.50)をキャッチする。そしてイタリア、ロシア、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの五カ国が救援活動に参加した。キングス・ベールにあるチッタ・デ・ミラノ号を拠点に救助活動を続けるが、北極の悪天候が続き、信号も途絶え、捜索は難航した。

6月2日朝日新聞では「この勇姿 いまいずこ」¹⁴と愛犬ティティーナを抱えて微笑むノビレの写真を大きく掲載し、生存は絶望視されていると報道した。しかし、その間も、北極では、救助の信号を送り続けていた。その信号を6月3日ロシアのアマチュア無線家シュミットが偶然傍受する¹⁵。

6月9日チッタ・デ・ミラノ号はノビレから信号「氷塊上に墜落、北緯八〇度三八度、東経二六度五五、氷塊高さ三百フィート、東に吹き流されつつあり」(11, p.50)を受け取る。ロシアの最新鋭の砕氷船クラッシン号も出動した。またアムンゼンも6月18日に救助のため北極へ向かう。7月14日までにノビレ含む、生存者9名と愛犬ティティーナの救出が完了する。しかし、アムンゼンは行方不明となり、未だ見つかっていない。

この遭難と救出の経緯については、世界的に関心が高く、救助されたノビレが即時にイタリア政府機関誌に手記を発表した。日本では大阪毎日新聞社が独占報道¹⁶し、手記発表2日後には順次紙上に掲載した。しかし、ノビレが他の乗組員を残して最初に救助されたことが非難されるようになり、イタリア首相ムッソリーニに緘口令をしかれ手記は未完となった。しかし、このノビレの手記をもとに、北村喜八(1898-1960)が脚色し、1928年8月に明治座で『ノビレ少将』という演目が早速上演¹⁷されている。

そもそも極地探検について日本でも関心が高かった。かつてアムンゼンが南極に到達したころ、同じく探検家の白瀬矗(1861-1946)も南極探検をしており、国民は熱狂的に支援していた。また1927年1月にノビレは来日し、5ヶ月ほど滞在している。さらに、アムンゼンも1927年6月に来日している。特にアムンゼンは、その偉業が児童書¹⁸で紹介されるなど、広い世代か

¹⁴ <写真><地図>この勇姿いまいずこ.朝日新聞.1928-06-02、朝刊、p.7、朝日新聞クロスサーチ <https://xsearch.asahi.com/shimen/pdf/?1662352073655> (参照 2022-09-09)

¹⁵ イタリア号無電内容 恐らく生存.朝日新聞、1928-06-06、夕刊、p.2、朝日新聞クロスサーチ、<https://xsearch.asahi.com/shimen/pdf/?1662363360650> (参照 2022-09-09)

¹⁶ 世界各国で待ち設けるノビレ少将の遭難記 本社のみが報道の特権を得た 最も貴重な記録の発表 .大阪毎日新聞、1928-06-29、夕刊、p.2、毎索、<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WKAK/main.jsp?ssid=20220909135656341gsh-ap01> (参照 2022-09-09)

¹⁷ 延岩が北極のご勉強 ノビレ遭難実記に殊勝の研究.読売新聞、1928-07-26、朝刊、p.10、ヨミダス歴史館、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=wXenscXieflFVXvIXtO1rGK2W%2FdXWZbCfM3npTpCxng%3D> (参照 2022-09-09)

¹⁸ 三井信衛『少年大飛行家物語』(1928年、金の星社)では、アムンゼンの生い立ちから北極探検、来日した際に残した少年少女たちへのメッセージなど冒頭から180ページに渡りアムンゼンを称賛する内容となっている。

ら尊敬されていた。来日した6月21日には、NHKではアムンゼンを歓迎する『勇士礼讃の夕』という番組構成で放送された。18時『子供の時間』ではアムンゼンの偉業を紹介し、19時50分からアムンゼンによる講演(図3)¹⁹ 後ろにいるのは通訳の鶴見祐輔)が放送。ノルウェー国歌などの演奏の後、後述する築地小劇場によるラヂオドラマ『皇帝とガリレア人』(イブセン原作 小山内薫 訳)が披露された。イブセンはノルウェーの出身で「ノルウェーの歌とイブセンの劇で旅上を慰める」²⁰ 放送だった。

このように人々に広く尊敬されていたアムンゼンが、ノビレとの確執を超えて救出に向かい、氷塊に消えたことに対して、人々の思いは一入であったのではないか。これら極地探検への人々の関心、連日の報道、アムンゼンへの英雄視を背景に、イタリア号乗組員の遭難事故および救出の経緯は、日本でも広く知られていたと考えられる。



図3 NHK ラジオにて講演するアムンゼン 『日本放送協会史』より

1925年ラジオ放送開始—小山内薫と築地小劇場一派によるラジオドラマ

1925年(大正14年)ラジオ放送が始まり、聴取者(リスナー)を獲得しやすい娯楽番組として「ラヂオ劇」「ラヂオドラマ」が放送された。ラジオドラマの草創期については、竹山昭子『ラジオの時代』²¹に詳しい。ここでは「ラヂオでのみ発揮出来る効果を持った作品を放送する

¹⁹ 日本放送協会編『日本放送協会史』1939年、日本放送協会、p.208、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1263670> (参照 2022-09-09)

²⁰ [よみうりラジオ版] 征極王アムンゼン氏 自ら探検談を放送。読売新聞、1927-06-21、朝刊、p.9、ヨミダス歴史館、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=vF3aYHGJXPxALLu923GHQshdrJqKvcHZ9Rm0jNXR8VI%3D> (参照 2022-09-09)

²¹ 竹山昭子『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』2002年、世界思想社、全352頁

ことが出来た」²²と位置付けられている1925年のラヂオドラマ『炭坑の中』と、その制作を担った小山内薫（1881-1928）と築地小劇場一派について考察する。

1924年（大正13年）、小山内は、土方与志（1898-1959）らと築地小劇場を旗揚げする。これは小山内らの劇団名であり、日本初の常設劇場の名前でもある。旗揚げ時には、その後音響効果の創始者である和田精（1893-1973）や、役者の友田恭助（1899-1937）、その後『ク号』の放送指揮となる青山杉作²³（1889-1956）らが出た。

築地小劇場での公演や活動を精力的に行う一方、小山内は「ラヂオドラマは、舞台の芝居でもなく、映画でもない。この二つ以外のものでなければならない」と、斬新なラヂオドラマの脚本を探していた。²⁴ そのような時、1924年イギリスの劇作家リチャード・ヒューズ（Richard Arthur Warren Hughes, 1900-1976）が書いたラヂオドラマ『Danger』を知った。小山内は、早速翻訳しラヂオドラマ『炭坑の中』と改題し翌年1925年8月13日放送した。

『炭坑の中』は、炭坑の中で爆発が起こり、電燈が消え、道を塞がれた人々の物語である。番組冒頭にアナウンサーが「お聴きになる皆様も電燈をお消しになったら尚一層その気分に親しむことができるでしょう」²⁵と呼びかけた。命の危機、炭坑内の暗さ、爆発の音、浸水してくる水音など巧みに演出した。この時小山内は、「スタジオディレクター（スタジオディレクター）」とクレジットされており、のちの「放送指揮」にあたると思われる。また、小山内はこの放送で「エフェクト・和田精」というアナウンスをし、初めて効果音の担当者を明確にした。

その後も、小山内は海外の戯曲を中心に、劇場やラヂオドラマの場で上演を続ける。青山は築地小劇場設立の際に、役者としての参加を希望していた²⁶が、これまでの演出の経験を頼りにされ、役者として出演する一方、小山内と土方とともに、演出を中心的に担うようになる。青山の放送指揮が確認できる²⁷最初のラヂオドラマは、1926年（大正15年）3月17日、放送舞台劇『桶の中のゾゲネス』（シュミットボン作 森鷗外 訳）である。同年9月10日『横っ面をはたかれる彼』（アンドレーエフ原作 北村喜八・熊沢復六 訳）も放送指揮は青山で、解説に小山内、音楽指揮に土方も入っている。1927年（昭和2年）6月21日『皇帝ガリレア人』は、前述した通り、来日したアムンゼン歓迎のためのプログラムであった。放送指揮は小山内、

²² 日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和6年』1931年、誠文堂、p.280

²³ 俳優、演出家。新潟県生まれ。早稲田大学在学中から演劇活動に参加する。大学中退後、関口存男らと「踏路社」を創立。映画製作にも携わる。その後1924年に築地小劇場の創立に参加。1930年からは松竹少女歌劇団の育成、1944年に千田是也らと俳優座を結成。1951年第3回NHK放送文化賞を受賞。

²⁴ 日本放送協会編『日本放送史』1951年、日本放送協会、p.221

²⁵ 21、p.226

²⁶ 青山杉作追悼記念刊行会編『青山杉作』1957年、青山杉作追悼記念刊行会「回想記」より

²⁷ 佐々健治『ラヂオ演劇—鑑賞と作法—』1934年、同文館、p.108

効果は和田、青山は出演している。

1928年（昭和3年）4月4日放送ラヂオドラマ『ペエル・ギュント』（イブセン原作 楠山正雄 訳 エドワード・グライク作曲）は注目に値する。『ペエル・ギュント』は、放送前の3月26日-30日帝国劇場で上演されたものがラヂオ放送された。

築地小劇場は、1927年にはじめて帝国劇場で公演し、大成功を収めていた。『ペエル・ギュント』は、築地小劇場にとって、帝国劇場での3回目の公演であり、イブセン生誕100年記念として上演された。演出は小山内、土方、青山の3名が担い、効果として和田精がクレジットされている。近衛秀麿（1898-1973）の指揮による新交響楽団（のちのNHK交響楽団）が演奏した。ラヂオドラマ『ペエル・ギュント』は同じ体制で放送された。興隆をみせる築地小劇場の演技と大規模な交響楽団による演奏、ラヂオ的な音響効果を組み合わせ、このような大掛かりな放送を敢行したことは、ラヂオドラマの盛り上がり、重要性を鑑みることができる。

しかし、同年12月25日に小山内が47歳で急死し、築地小劇場は分裂することになる。1929年（昭和4年）3月に土方らは退団。青山は、劇団築地小劇場メンバーとして残留する。同年6月6日に原模を確認するかのように青山の放送指揮、和田の音効でラヂオドラマ『炭坑の中』を再制作し放送する。1930年（昭和5年）8月、青山は劇団築地小劇場を離脱、劇団新東京を設立する。同年11月10日に放送したのがラヂオドラマ『ク号』である。

『ク号』台本の検討



図4 『ク号』収録の様子（『ラヂオ演劇』より）

NHK 放送博物館に保管されている台本の表紙には次のように記述がある。以下、台本の引用については、内容を変えない程度に適宜現代表記にする。

ラヂオドラマ 放送 昭和5年11月10日

クラツシン號イタリア號を救ふ（ノビレ少将遭難記）

表紙を繰ると、原作者と配役、スタッフ名が並ぶ。

原作者：フリードリッヒ・ヴォルフ 武田忠哉 譯

配役

氷塊上のイタリア号 ラヂオ兵ピアージ 友田恭助

同 トロヤーニ 藤輪和正

同 オーラス 木村太郎

同 アルピーノ 南 建真

同 ヴィリエーリ中尉 御橋 公

ロシヤのある百姓の母 東山千栄子

同百姓 フィョートル 上田眞平

ロシヤのある工場の議長 西口吉之助

同 聲の二 浅川重夫

同 リュードミーラ 田村秋子

マルイギン號船長 志水辰三郎

同 哨兵 小川丹眞

ベルリンの号外売り（號外賣）小坂眞敏

クラツシン号のシェフノフスキー 澄川 久

同 アレクセイエフ 白井友三

同 司令官エッジ 石川 治

同 第一の助手 寺田太郎

同 ラヂオ兵 菱川高男

その他各所からのラヂオの声 及大勢

効果 新東京効果部

出演 劇団新東京

ドイツの医師であり作家のフリードリヒ・ヴォルフ (*Friedrich Wolf*, 1888-1953) が、ラジオドラマのために戯曲化した『SOS … rao rao … Foyn - Krassin save Italia』(ドイツ語タイトル『“KRASSIN” RETTET “ITALIA”』)が原作である。このラジオドラマは、1929年11月にドイツで放送された。放送時間は64分²⁸。それをドイツ文学者の武田忠哉²⁹(1904-1994)が翻訳した。なぜヴォルフが遭難事故の翌年にラジオドラマ化したのか、なぜ武田がこの脚本を翻訳し、劇団新東京が制作したのかについては、今後の研究課題だが、武田は、当時ドイツ文学でも盛んになっていた芸術運動「ノイエ・ザハリヒカイト」³⁰に関心を持ち、その中で活躍していたヴォルフの作品に注目していた。この『ク号』に対して武田は(救出の)「その場面は地球上の各方面に及び、放送—Achtung : Achtung:—のライトモチーフと擬音の光彩的な配列が、完全なノイエ・ザハリヒカイト的印象を興へないでは止まない」³¹と書いている。

配役は、築地小劇場の初期メンバーの中で、分裂後も青山と志を同じくしていた友田、東山、田村の名が確認できる。しかし常に効果として参加していた和田の名はない。このころ和田は、NHK大阪放送局の演出部に入社したので和田が関わったかどうか、放送番組表では確認できない。

台本では、信号を送るチッタ・デ・ミラーノ号のシーンから始まり、そしてコペンハーゲン、オスロなど各地放送局がイタリア号へ向けて信号を送り続けている様子を描く。

モシ、モシ。

キングスパーのチッタ・デイ・ミラーノ号

コチラは探検船チッタ・デイ・ミラーノ号であります。

我々の手許へは、もう三六時間もノビーレ少将からの報告が届きません。……

モシ、モシ

コペンハーゲン。

モシモシ、こちらは波長920、コペンハーゲン放送局であります。……ただ今海軍飛行士リュツオ

²⁸ DRA アーカイブより <https://hoerspiele.dra.de/vollinfo.php?dukey=4983985&vi=24&SID> (参照 2022-09-09)

²⁹ ドイツ文学者。1927年東京帝国大学独文学独文科卒。映画撮影に従事したことがある。著書『ノイエ・ザハリヒカイト文学論』(1931年、建設社)など。

³⁰ (ドイツ語: Neue Sachlichkeit) 新即物主義。第一次世界大戦後のドイツで1922年頃から表現主義への反動として起きた芸術思潮。「ノイエ・ザハリヒカイト」とも表記するが、本稿では武田の表記に合わせる。

³¹ 東京帝国大学独逸文学会編著『独逸文学研究 第4輯』「フリードリヒ・ヴォルフの『シアンカー』」1930年、第一書房、p.554

フ・ホルム氏は母船ホビー号から、その後のニュースを得る目的でキングスベアに向けて航空の途に上りました。

モシモシ

オスロ

(ジャズ・レコードが直ぐとまって、休息の合図)

モシモシ、こちらは波長736、オスロ放送局であります。こちらではローマの発信が感じられます。我々はイタリア号及びノビーレ少将と言葉が通じるのを待っています。……経度60度に位しているすべての発信所は目下、放送を中止して居ります。我々は二時間毎に、五分間呼び続けています。……コチラは波長736、イタリア号は今どの地点にいますか。

そして、場面はある新聞社の編集局を描く。

ある一流新聞の夜間編集局

(二人の夜間編集部員が仕事をしている。電報と電話を受けそれを朝刊に組むのである。)

編集者A 何といふことだ。此のノビーレ少将のために社の仕事がまるでひっくり返ってしまった。

編集者B ノー、ノー、少将のおかげで僕等に仕事があるんだ。……小さなトクダネに夢中になるのは止め給へ、……少将はシュビツベルゲンの北のどこかで氷の上を歩いていることにして置けばいいじゃないか。

世界各地の放送局が放送を一時停止し、イタリア号に信号を送っていた事実と、それを連日報道していた新聞社の様子を巧みに交差させている。一方、氷解の上で信号を送り続けるイタリア号の乗組員たちを、実際にラジオ兵として搭乗していたピアージを中心に描く。

ピアージ (ラヂオセットに向って) 此処です、此処です。イタリア号……波長926、位置北緯80度50分東経27度15分。……SOS……SOS……ノビーレ少将……我々は氷塊の上にあります。(略) 船員中、6名は軽気球の表皮と一緒に飛ばされました。……我々は毎時10分間、この叫びを発信しています。SOS rao Foyn 聞こえるか、どうか返事をして下さい。

墜落時に、軽気球と共に6名が飛ばされて行方不明になっているので、これも事実を取り入れている。位置について、時期によって多少のずれはあるもののおおよそ一致している。次にこの信号をシュミットが受信する場面が描かれる。

ロシア、ヴィヤートカ州、ヴォズニエシエーンスロイエ村、

(貧しそうなある百姓屋の内部、ロシア人のラヂオ・アマチャー、ニコライ・シュミットが、手製短波長受信機を前にして座っている。1928年6月2日第26次シュミットは、丁度、ある音楽演奏の放送に聞くように調整していた。……だが音楽にまぎって大洋上の船から同波長の発疹が響いて来る。……断続的に色々な国語の文句が聞える。

彼の母は起こりながら、部屋の中の物を引っ掻き回している。)

母 ニコライ……一体悪魔の小箱がどうしたっていふんだね

ニコライ (セットに向かって) ママ、しづかにしてください、名前が聞こえて来るんです。

(略)

ニコライ (興奮して) 益々聞こえて来る、まだ続けている SOS……SOS 何という名だろう (綴る) テンゴ……テルーラ……SOS、SOS Rao,Rao, すると船の名は「Foyrn」で云うんだな、(突然) シッ また一語聞こえる、名前だ、同じ名前を繰り返している。イーターリア……イーターリア……さうだ、イタリアっていふんだ、……イタリア号が難破中なんだ、まだ名前が聞こえる。も一度聞こえるノービーレ……ノービーレ。(飛び上がる) ノビーレ少将が発信しているんだ!!

アマチュア無線家シュミットが偶然傍受した事実に基づき、ラヂオのことを「悪魔の小箱」と呼ぶ母親を登場させ、ラヂオという新しい技術によって、庶民が世界的な出来事とつながるドラマチックなシーンに仕立てている。そして場面はベルリンの街路となり、「号外。号外。ノビーレ少将最近の消息！ イタリア号は氷塊の上へ難船した……ノビーレ少将は生存中」との声が響く。ここでベルリンの号外売りのシーンにしたのは、ドイツの聴取者にリアリティを感じられるためと考えられる。その後、イタリア、ロシア、スウェーデンなど各国が救出のため活動する様子を描く。事実に沿って、ノビーレ少将が最初に救われたこととアムンゼンが救出に出発したことを中盤に号外売りのシーンで説明する。

バザルケ (号外を読み終わって) おい、君、ノビーレ少将は一人だけ救われたんだってさ、「赤い天幕」の外の奴らはまだ救助されないんだよ (又号外売りの声が通る)

号外売り 号外!! ノビーレ探検隊最近の消息!!

有名な北極探検家ラウル・アムンゼンはギルボー大尉と一緒に6月18日、複葉機ラータム号に搭乗、340リットルのベンジン油を積んで、たった今「赤い天幕」救助のために出発した！

ノビレの救出をこのシーンのやり取りだけで完結しているのは、当時ノビレが非難されていたからと考えられる。そして終盤、クラッシン号（エッジ司令官）が、ツアッピとマリアーノの発見のシーンを描く。ツアッピとマリアーノ、マルマグレーン3人は、ピアージたちとは別に「赤い天幕」を離れ徒歩で救助を求め、マルマグレーンのみ死亡した事実に基づいたシーンになっている。

エッジ（ツアッピに向かって）ツアッピ大佐、ようこそクラッシン号に来てくださいました！ あなた方はマルマグレーン、ツアッピのグループの方々ですか。

ツアッピ そうです。船長…僕はツアッピです。

エッジ あそこに居られるのは御同僚のマリアーノ大佐ですか

ツアッピ そうです。閣下、あそこに居られるのが、マリアーノ大佐です。

エッジ ではマルマグレーン氏は何処に居られますか（沈黙）大佐！ 僕の質問がお分かりになりませんか

ツアッピ いや、よく判って居ります。…何という不幸な話でしょう。…マルマグレーン君が氷の上で亡くなってからもう十三日になります。

そしていよいよ最後に「赤い天幕」にいる乗組員たちの救助のシーンとなる。ここには、ピアージとヴィリエーリ中尉らがいる。ピアージがクラッシン号からの信号を受け取り、救助が近づいてくることをヴィリエーリに伝える。

ピアージ（セットへ向かって）OK… 此処だ、此処です。イタリア号、Ras, Ras, ……Foyrn……聞こえます。分かります。ツアッピ大佐のグループはクラッシン号に救われたんだ…クラッシン号万歳！

ヴィリエーリ（続けて）ツアッピ大佐が救助されたんだって！

ピアージ 静かにしてください、中尉殿… イエース、聞き取れます。砕氷船は、「赤い天幕」の方向へ航路をとっている。

（略）

ヴィリエーリ （後方へ向かって叫ぶ）ありったけの材木と帆布をくべろ！ タールをかけるんだ！
ヴェスヴィウスみたいにのろしを出さなけりゃいけない！（二人のアルピーノが天幕
から出てくる）

（略）

ピアージ （突然、「青春譜」を歌いはじめる。二人のアルピーノも調子を合わせて歌う）青春よ、
青春よ、美しい春よ

お前の歌声はなんと恍惚の中に響くことだろう

（歌、クラッシン号のサイレン、ヴィリエーリ中尉の命令、それ等の錯綜）

ヴィリエーリ 軍紀を守れ！ 落ち着け！ 3人の男が旗を持って、コッチの氷の方へやってくる！
雪靴をはいている！ みんな頭を立てて、首をしっかりさせる（叫ぶ） イタリア万
歳！ クラッシン号万歳！

（氷塊を越えて、クラッシン号の探検隊長サモイロヴィッチ、政治委員オラース、医師スレドニエフ
スキー博士、それから三名の乗組員がやってくる）

オラース （ヴィリエーリに近づく）ソビエト連邦共和国の砕氷船クラッシン号は軽気球イタリア号
の乗組員を船中に収容する目的でやってきました。

ヴィリエーリ クラッシン号万歳！ イタリア号の乗組員四名、ベネーホック教授とヴィリエーリ中
尉はイタリア国旗の名の下に、この比類内クラッシン号に向かって心からなる敬意を
表すものであります。

（略）

ピアージ 直きです、中尉殿、たった一度です、最後の放送をさせてください（電流を通じる）Rao,Rao,
……イタリア号、クラッシン号が到着し、我々は救助されました（セットを閉じる）

了

このシーンも、クラッシン号がけたたましくサイレンを鳴らし、ヴィリエーリ中尉たちは、
煙を立てて合図した事実に基づいている（11, p.65）。サイレンの音と、命令が飛び交う騒ぎの
中、ピアージが突然歌い出す青春譜が、救い出される喜びをクライマックスとして盛り上げて
表現している。

以上のように、新聞の報道やノビレの手記など、広く知られている事実に基づいて、巧みに

ドラマを構成していることがわかる。

『ク号』の評価について

『ク号』について、放送後から今日までいくつかの書籍に記述が確認できる。

まず、『ラジオ年鑑 昭和7年』³²に「之はラジオドラマの形式として従来一場面、或いは多くて五六場面に限られていたものが、数十を数える程のカットバック、擬音と台詞による場面の説明的概念によって、幾つものカットバックが自由自在に可能なことを證據立てたものであった」(32, p.288)と記述されている。

佐々『ラジオ演劇』には、より詳しく『ク号』について記述がある。佐々は、学生時代から長年演劇の研究を続け、NHKに入局してから新興演劇としてのラジオ演劇の研究を進めた³³。本著では、ラジオドラマや舞台劇、脚本朗読などを「ラジオ演劇」として、鑑賞の方法や脚本の作り方、擬音、放送略史についてまとめている。『ク号』については「ラジオ・ドラマの本格的な作品として『炭坑の中』とは違った意味で、記憶さるべき作品」(27, p.212)、「極めて進歩した形式と技巧を持っている」(27, p.136)と、台本を引用しながら、次のように評価している。

此のラジオ・ドラマはラジオの場所を超越するといふその特性を巧に利用する。(27, p.213)

イタリア號は、ラジオがなかりければ恐らく北極の藻屑と消えたであらうが、幸にラジオに救はれたといふ極めてラジオ的なラジオ・ドラマが成立する訳である(27, p.216)

此のラジオ・ドラマの最も特長とする所は、ラジオの利用である。放送の利用である。

(略) イタリア號の SOS は短波で発信せられ、それが受信され、又その救助の船クラッシン號も放送で手配された。而も最後に救助成功の通信も、ラジオでされたのであった。

その意味において、ラジオにおいて初めて、独特の意義を發揮したものといえる。(27, p.217)

この評価を踏まえて、1951年『日本放送史』では「作品、演出、演技、擬音などの、昭和初期の苦心が実を結び、ラジオドラマを更に高度の第二段階に進めた」(24, p.503)と、記述される。

³² 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和7年』1932年、日本放送出版協会、全631頁

³³ 日本放送協会業務局文藝部長 小野賢一郎の序文より

「炭坑の中」では狭い暗い一ヶ所における出来事だったが、この劇ではキングスベアーの上のミラノ
號、コペンハーゲン、オスロー（略）その他が舞台上、場面は二十景、「炭坑の中」と対照して両極
端の放送形式であった。（略） こうして「炭坑の中」を頂点にしていたラジオドラマはここに新しく
広い視野に立つに至ったのである。（24, p.504）

これらの評価は、ラジオの特性を生かしたこと、これまでになかった 20 シーンに及ぶカット
バックで世界中を繋いだことである。事実に基づいたドラマであることはあまり言及されてい
ない。

ところが、1968 年（昭和 43 年）『放送夜話—座談会による放送史』では、「和田さんと青山
先生の傑作で、ドキュメンタリードラマのはじまりですよ」（10, p.91）³⁴ と言及されている。そ
して、2001 年（平成 13 年）『20 世紀放送史 年表』³⁵ には「ドキュメンタリー形式のラジオド
ラマ」と記述されている。

なぜ「ドキュメンタリードラマのはじまり」と言われたのか

『放送夜話』が出版された 1960 年代にはすでに「ドキュメンタリードラマ」と番組名に付記
されていたり、番組説明で明記されたりするようになっていた。1961 年（昭和 36 年）5 月 10
日放送『（へき地キャンペーン）ドキュメンタリー・ドラマ 土の眼』（小田和生 作 和田勉
演出）の台本に、製作意図として次の記述がある。

へき地に対する現代文明の侵入の形を描く。一日本のへき地は都会と背中あわせのところであり、む
ろんそのゆがみは大人を通じて子供たちの中にある。このドラマは現地の音と写真ロケにより主とし
てスタジオで作られたドキュメンタリードラマの形をとる

地方のある村にダムが築かれていることを背景に、地主と日雇労働者の貧富の格差を描き、
その村で実際に暮らす子どもたちの写真や現地の録音を構成し「このシーンがこのドラマの中
心的な形となる」と説明されている。

また、1963 年（昭和 38 年）12 月 7 日『テレビ指定席「魚住少尉命中」』（吉田直哉 演出）は

³⁴ この座談会では、島浦精二（昭和 6 年アナウンサーとして NHK 入局）が総合司会で、里見惇（作家）、
夏川静枝（俳優）、小林徳二郎（プロデューサー）、和田精が対談しており、「昭和五年にドキュメンタリー
劇」（p.90）と見出しがある。引用部分の発言は小林。『ク号』では和田は効果としてクレジットされてい
ないのだが、和田は否定していない。

³⁵ 日本放送協会編『20 世紀放送史 年表』2001 年、日本放送出版協会、全 802 頁

テレビドキュメンタリーで活躍していた吉田の初のドラマ演出で、主人公が出撃し、敵艦に命中するまでの30分間をリアルタイムに描く。さらに、1966年8月31日FMラジオ放送『コメント・イケヤ』（寺山修司 作 佐々木昭一郎 演出）は、1963年に新しく発見された彗星と、蒸発した会社員、盲目の少女のモノログが交錯する。彗星の発見者のインタビューとして池谷本人が登場する。これらはいずれも、番組名に「ドキュメンタリードラマ」の明記はないが、その先駆的な作品としてしばしば挙げられる。またイタリア賞を受賞しており、ラジオ・テレビ制作者たちも注目していた。

また、1965年（昭和40年）3月21日『ドキュメンタリー・ドラマ「遭難」』（たなべまもる 脚本 岡崎栄 演出）が放送されている。これは1963年の大学山岳部13名が遭難死した事実に基づいて、遭難した息子を探し続けた父親本人が出演し、捜索隊や山小屋の人々を交えて捜索から発見までの様子を再現した。

一方、一般書籍にも「ドキュメンタリードラマ」の記述も確認でき、並河『演劇・娯楽番組』³⁶では、ドキュメンタリードラマを次のように説明している。

ドキュメンタリー・ドラマ これは、記事（事実の報道）を中心とし、資料を生かし、時に現地録音等を使って、物語体、または演劇的構成によって組み立てられるドラマである。（36, p.64）

題材としては、実際にあった事実、実在の人物をドラマの内容、または主要人物として書かれたドラマで、それには、実際の場所で収録された人や事物の録音を使用したり、実際に音を混ぜ、実在の人物に俳優のせりふを加えたりして作る報道性、社会性の強いドラマである。（36, p.78）

これらの状況から、1960年代の「ドキュメンタリードラマ」とは、次の5つのいくつかを満たしている番組と考えられる。

- (1) 実際にあった出来事
- (2) 現地録音（あるいは当事者の出演）
- (3) 再現
- (4) 物語として演出されている
- (5) 報道性、社会性が強い

この5つを、『ク号』に当てはめて考察する。

³⁶ 並河亮『演劇・娯楽番組』1956年、同文館、全168頁、「放送の知識シリーズ」(5)

- (1) 実際にあった出来事 → 1928 年に実際にあったイタリア号の遭難、クラッシン号の救出がもとになっている。登場人物の名前も実在した通り。
- (2) 現地録音（あるいは当事者の出演）→ 放送当時、録音の技術がない。また海外の出来事なので、これは当てはまらない。
- (3) 再現 → もともとヴォルフの戯曲は、報道された事実に基づいて時系列的に構成されている。
- (4) 物語として演出されている → 当時録音技術がないので、実際にはどのような無線のやり取りがあったか不明だが、特にアマチュア無線家ニコライが傍受したシーンは、事実に即しながら、劇的に演出されている。また、サイレンと狼煙の実際のエピソードから盛り上がりのあるクライマックスとして描き、主人公の最後のセリフが「最後の放送をさせてください、イタリア号、クラッシン号が到着し、我々は救助されました」は、ラジオの特徴を生かした演出である。
- (5) 報道性、社会性が強い → 実際にあった出来事で、連日報道され、社会的関心も高かった。

(2) 以外は当てはまり、当時の技術的な問題からできなかったので、「ドキュメンタリードラマのはじまり」と表現したと考えられる。

まとめと今後の課題

ラジオドラマ『炭坑の中』で初めて、ラジオの特徴を効果的に活用した演出をすることができた。その演出にあたった築地小劇場の小山内と、効果の和田、築地小劇場の俳優であり演出家の青山が、その後のラジオドラマの発展に貢献した。しかし、小山内の急死後、劇団が分裂していく中、青山が『ク号』の放送指揮をとり、「更に高度の第二段階に進めた」と評価されることとなる。その後 1968 年「ドキュメンタリードラマのはじまり」と言及され、ドキュメンタリー形式のラジオドラマとしての評価が定着するに至る。

しかし「はじまり」（起源）と位置付けられていたとしても、小山内の急死による築地一派の分裂とその後の戦時体制により、この『ク号』を直接的に継承し発展させたドキュメンタリードラマは確認できない。また、もともとヴォルフの戯曲が、ドキュメンタリードラマの要素を多く持っていたことから、さらにその源流を遡り、ヴォルフの戯曲がどのような背景から成立したのかを探る必要も生じてくる。

ヴォルフは、ラジオという新しい聴覚メディアの特徴を生かし、聴取者に「これは、本当に

無線でやりとりされた内容」と感じさせることを意識して戯曲化したと考えられる。つまり実際の出来事を物語化したのではなく、あたかも、今まさにラジオのやりとりがされているかのような「本物らしさ」「リアリティ」を追求したといえる。しかし、戯曲を日本語に翻訳することでそのリアリティは失われ、聴覚的な特色が際立つようになった。

冒頭で挙げた『欧州から愛をこめて』も、当時試作されたばかりの小型ビデオカメラを活用したことで、実際の出来事を「現場実況する」リアリティが演出された。そのようなドキュメンタリーとフィクションの融合が、今日のドキュメンタリードラマの特色になっていく。

なぜヴォルフが実際の遭難事故の翌年にラジオドラマ化したのかは、「ノイエ・ザハリヒカイト」の中で、ヴォルフのルポタージュへの関心をさらに探求する必要がある。

また武田は、この『ク号』以外、ラジオドラマや演劇の翻訳に関わりが見出せない。なぜ武田がこの戯曲を翻訳し、劇団新東京が制作したのか、その詳細も定かではない。武田と築地小劇場（あるいは青山、NHK）との接点について調査を進め、制作当時ヴォルフの「リアリティ」の追求をどこまで評価し、意識していたのか引き続き検討する。

また、確認できた『ク号』の評価は NHK 関連のみで、聴取者やほかの制作者の評価が不明である。55 分間のラジオドラマに 16 名以上の男性出演者があり、聞きなれない海外の名前で登場人物を当時の聴取者がはたして理解できたかどうかも疑問点となる。現在、この台本をもとにラジオドラマを再現する試みを準備している。ドキュメンタリードラマの先駆作としてラジオドラマ『ク号』を位置づけることにより、ドキュメンタリードラマをジャンルとして際立たせる特色が浮かび上がってくる。